

# アート・イン・ホスピタル

## 佐賀大学医学部附属病院におけるホスピタルアートの実践

土屋 貴哉<sup>1</sup>, 柳 健司<sup>2</sup>

### Art in Hospital: A Practical Study of Hospital Art in Saga University Hospital

Takayoshi TSUCHIYA<sup>1</sup>, Kenji YANAGI<sup>2</sup>

#### 要 旨

本研究は、佐賀大学医学部附属病院との連携プロジェクトとして、小児病棟内における「ホスピタルアート」の試みである。土屋、柳によるプロジェクト管理のもと、芸術地域デザイン学部芸術表現コースミクストメディア専攻生及び地域デザイン研究科コンテンツデザイン特別研究受講生計14名が、小児病棟の廊下全域（約50m）とプレイルームを中心とした空間設計・制作・施工を実施。実施場所になる小児病棟の患者やその家族への心のケア、および医療従事者の心にもゆとりを与え、医療の質、コミュニケーションの質を高めることを焦点としたアートによる恒久的な院内空間づくりが本研究の目的である。病院は公共性の高い場である。そして鑑賞者の患者やその家族、病院関係者は、美術館のように芸術表現を観る為にそこに訪れている訳ではない。故に表現内容を考える時、その対象者のことを理解し寄り添うことを意識することが大切である。対象者や環境に配慮し機能する表現を教育上のテーマとし、表現活動を社会的行為として、より広い視野で捉える意識を育むとともに、「社会における芸術の可能性」の追求を社会実践した。

【キーワード】 美術、デザイン、アート、ホスピタルアート

#### 1. 研究の目的と背景

本研究では、佐賀大学医学部附属病院との連携プロジェクトとして、小児病棟内における「ホスピタルアート」としての空間設計、制作・施工を実施した。実施場所になる同病院内の小児病棟(こどもセンター)は、新生児から学童期・思春期と年齢幅の広いこどもたちを短期・長期的に預かる場所であり、彼らの病状もまちまちである。治療を受けるこどもたち自身は勿論、その家族たちも多くの不安を抱えている。ま

<sup>1</sup> 佐賀大学芸術地域デザイン学部 地域デザインコース  
Course of Regional Design, Faculty of Art & Regional Design, Saga University

<sup>2</sup> 佐賀大学芸術地域デザイン学部 芸術表現コース  
Course of Art, Faculty of Art & Regional Design, Saga University

た、医療スタッフたちも緊張状態の中でこどもたちと接しているため精神的な負荷が高い。診る側と診られる側双方の不安と緊張状態をアートの力で少しでも和らげるのが本研究の目的である。

ホスピタルアートとは、無機質な院内にアートを導入することで、患者の心を和らげ癒しの効果を生む芸術を通じた先進的医療ケアであり、北欧・英国などの医療先進国では広く普及している。日本でも、四国こどもとおとなの医療センターなど、積極的にホスピタルアートを実践している施設も増えてきているが、まだまだ事例は十分では無く認知度も低い。

日本の病院では、設置に根拠があるとは思えない絵画や彫刻が、安易に飾られていることも少なくない。それらは一体誰の為のものなのか、本当に患者のことを考え飾られているものなのだろうか。院内に絵や彫刻が飾ってさえあればホスピタルアートというわけではない。アートには人を癒す力があり、笑顔にする力もある。医療の現場で、患者や医療従事者の精神的負荷を少しでも和らげ心にゆとりを持てる快適な環境づくりの重要性が叫ばれる現代において、ホスピタルアートは非常に重要な取り組みである。

## 2. プロジェクト工程

### 1) 全体スケジュール

企画・設計・サンプル制作	制作・施工	竣工・新病棟稼働
28年11月：意見交換会	7月中旬：全体プラン決定	9月初旬：竣工
29年5月上旬：現場下見	7月下旬：スタジオ制作開始	9月下旬：新病棟内覧会
6月下旬：企画プレゼン	8月上旬：現場制作施工開始	10月初旬：新病棟運用開始

### 2) 企画・設計・サンプル制作

28年11月に附属病院より病棟改装にあたり小児病棟へのホスピタルアート導入の依頼があった。同月病院長、小児科担当医、師長および設備課担当者との意見交換会を実施。安易に既存作品を設置するのではなく、患者への心のケアは勿論、医療従事者の心にもゆとりを与えることで、医療の質、コミュニケーションの質を高める本学大学病院こそ独自のアートによる院内空間づくりを目指すことを基本理念とし、翌29年度の両学部連携プロジェクトとして実施することで合意した。

29年5月上旬、要望の具体化に向け、プロジェクトを担当する学生14名と現場視察に訪問。小児科担当医からホスピタルアート実施区域の希望が伝えられた。実施希望の病棟内区域は以下の通りである。

基本理念：単なる作品の設置ではなく、患者の心のケア、医療従事者の心にもゆとりを与える独創的なアイデアによる院内空間づくり。

実施区域：

- ・小児科病棟廊下壁面全域（約50m）
- ・病室ドア（全13室）
- ・病室入口（全13室）
- ・プレイルーム

現場視察後、学生は4グループに分かれ、先に示された本プロジェクトの基本理念を踏まえ、小児病棟医療従事者の意向や学生たち自身が見聞きした内容を基にディスカッションを重ね、グループ毎に実施区域全体の企画立案、設計およびサンプル制作を行った。病院側からは、この時点では独創的プランの期待

から衛生面・安全面・管理面・精神面にまつわる具体的な条件提示が最小限であった為、企画立案にあたり自主的にそれらを考慮しつつも、学生たちは自由闊達に企画立案に取り掛かることができた。

6月下旬、企画プレゼンテーションを実施。附属病院にて、病院長、小児科担当医、小児科師長、設備課担当者、本学部長他、関係者出席のもと学生4グループの企画提案がなされた。(図1) 4案の中から1案を選抜決定する予定だったが、



図1 附属病院でのプレゼン風景

プレゼンテーション後の意見集約の課程で、病院側(医師・

師長・設備課)の意見を引き出した結果、企画内容のほか衛

生面・安全面・管理面の問題も鑑み1案に絞るのではなく、それぞれのプランを複合的に採用し、統一した世界観に集約する方向で合意形成が図られた。その際に出た意見を一部ではあるが、下記にまとめる。

- ・ 刺激的でない穏やかで中庸的なイメージと色彩を用いる。
- ・ 素材・塗料の品質。ランクはFフォースターとする。(ホルムアルデヒド規制最高ランク)
- ・ 汚れが沈着しやすい素材(布等)は使用しない。
- ・ 施工の耐久性は大丈夫か。
- ・ 描かれるものは「架空のもの」ではなく、こどもたちに一目瞭然で分かりやすいもの。
- ・ 衛生面で長期的に管理しやすい。
- ・ アルコールによる毎日の除菌拭き掃除がしやすい。
- ・ 経年劣化の心配が少ない。保存しやすいか。
- ・ 安全面の考慮。凹凸・段差の出る表現は極力なくす。
- ・ 通常医療業務に支障がない。
- ・ 二次的、発展的な活用ができる。
- ・ 佐賀らしさを表す素材や表現は歓迎。

### 3) 全体プラン

7月中旬、上記を踏まえ、学生たちの4案を複合的に採用整理した最終プランを病院側に提案し、提案内容に対する理解は得られ、最終合意を図ることができた。ペイントに用いる塗料色のイメージ共有が最もデリケートであり、日本塗料工業会発行の色見本帳を用いて塗料色を決定。色票番号で管理することで病院側と色彩イメージの共有を図った。総合コンセプト及び各区域の具体的内容は以下の通りである。なお、ナースステーションカウンター、こどもセンター入口壁面が新たに実施区域に加わった。

キーコンセプト：「自然」「こもれび」「四季」「絵巻物」「佐賀」

区域別プラン概要：

- ①小児病棟廊下壁面(50m×2面)：森林と動物の壁画
- ②病室入口(13室)：折り紙風モザイクによる病室入口サイン
- ③病室ドア(13面)：丸を基調としたカラーペイント
- ④ナースステーションカウンター：着せ替えマスコットキャラクター
- ⑤プレイルーム：季節の樹木のカラーペイント

## ⑥こどもセンター入口：陶片による銘板

各ビジュアル詳細と設えについて：

- ①小児病棟廊下壁面：森林と動物の壁画。廊下に木々を描くことで、温かみのある居心地のいい空間を創り出す。木々の間には県鳥のカチガラスを含む15種類の動物たちを描く。生息時代・地域の異なる動植物を同一絵画空間に配置したのは、日本画の伝統的な画題のひとつである「四季草花図（註1）」から着想を得ている。また廊下50m全域をひとつの絵画空間（世界）として扱うことで、子どもたちが歩行したり、車椅子やストレッチャーに乗りながら廊下を移動すると場面が次々に展開していく、廊下全域を使った絵巻物（註2）のような構造を意識した。塗料ランクはFフォースター。水性塗料を使用。（図2）



図2上：廊下全域イメージ図／下左中右：部分イメージ

- ②病室入口：折り紙風モザイクの病室サイン（13室13パターン）。折り紙で作成した各種動物をモチーフに、幾何学的に図案化した形を病室13室にそれぞれ設置。ドアとサインの色を統一することで病室ごとに特徴を持たせ、子どもたちが自分の部屋を覚えやすく愛着が持てるよう工夫。透明アクリル板を支持体にし、板裏面から塗装。（図3）



図3 病室サインデザイン

- ③病室ドア：丸を基調としたカラーペイント。病室入口サインの基調色に合わせて扉をペイントする。上部に丸くあしらい軽やかな雰囲気演出。室内側面も同様に着彩し、室内にいなながらも子どもたちが自分自身の病室カラーを感じられると同時に、廊下の世界観との一体化を演出。塗料ランクはFフォースター。水性塗料を使用。(図2)
- ④ナースステーションカウンター：着せ替えぬいぐるみマスコットキャラクター。動物のクマをパッチワーク風にオリジナルデザインし、座ったポーズで自立する立体のぬいぐるみとして作成。小児病棟へ訪れる人々を歓迎するマスコットキャラクター。季節ごとに着せ替えができ、春夏秋冬各季節の色をモチーフに花をあしらう。院内にいなながらも視覚的に季節を感じられる。着せ替えは以下4種類を作成。(図4)
- ・春：「桜」ワンピース
  - ・夏：「ひまわり」甚平
  - ・秋：「コスモス」カーディガン
  - ・冬：「椿」コート
- ⑤プレイルーム：季節の大木のペイント。プレイルームの壁面に春の桜、夏の笹、秋のイチョウ、冬のもみの木のペイントを施す。季節ごとの病棟内イベント時に子どもたちが大木に装飾を施すなど、2次的／発展的に楽しむことができる。塗料ランクはFフォースター。水性塗料を使用。(図5)
- ⑥こどもセンター入口：佐賀の特産品である有田焼を意識した藍色紋様の陶片による銘板。「こどもセンター」の文字を陶片の組み合わせによって表現。接着は専用シリコンで施工。陶片のパーツは「清少納言智恵の板(註3)」システムに基づき切出し、その陶片パーツを組み合わせて各文字を作成。(図6)



上：図4 着せ替え衣装／下：図5 プレイルーム大木デザイン／右：図6 陶片銘板デザイン

#### 4) 制作・施工

スタジオでの事前作業：プラン決定後に必要な材料・道具・機器等を手配。7月下旬から学内アトリにて事前作業を開始。現場での作業を効率良く進める為の各種パーツ制作を担当ごとに分かれ行った。作業内容は次の通りである。

##### ①小児病棟廊下壁面とプレイルーム及び病室ドアペイントの為の事前作業：

現場でのペイント作業に向け、下絵を原寸大にデータ化し、マスキングシートをプロッターにより切出し出力。シートは廊下壁画用100分割、プレイルーム壁画用20分割、病室ドアペイント用39分割。計159枚制作しそれぞれアプリケーションシートにマウント。(図7)



図7 マスキングシート制作

##### ②病室サイン設置の為の事前作業：

病室入口サインの現場予定箇所の材質が、塗料を直接塗ると剥離する可能性が高いことがわかった。現場予定箇所を採寸、同一サイズに透明アクリル板を切り出し、アクリル板裏面から各図像をペイント。サイン表面がアクリル板で保護される為、経年劣化しにくい。ペイントは廊下壁画同様にプロッターで切出し出力したマスキングを使用。(図8)



図8 病室入り口サイン制作

##### ③こどもセンター銘板の為の事前作業：

有田焼による陶片パーツの制作。本学有田キャンパスの窯芸設備を利用し、土練り、成型、釉薬、窯焚きを行った。(図9)



図9 陶板パーツ制作

現場での制作および施工：

8月上旬より現場で制作、施工を開始。引き続きスタジオでの作業も同時進行され、現場班とスタジオ班に分かれ各作業が進行した。8月下旬にスタジオでの作業はほぼ完了、全員が作業場所を現場に移した。

##### ①小児病棟廊下壁面とプレイルーム及び病室ドアペイントの為の現場作業：

廊下壁面や病室ドア、プレイルームの所定の位置へ、スタジオで制作したマスキングシートを貼り合わせ色票番号で管理共有した塗料を塗装。2～3回の重ね塗り後マスキングシートを剥がし、加筆による微修正を施し完成。下絵を事前にマスキングシートに起こしていたので、現場での作業負担が特定の学生に偏らず、分担し同時進行で取り掛かることができた。(図10)



図10-1 廊下壁画現場作業



図10-2 プレイルーム現場作業



図11 病室サイン施工



図12 陶片銘板施工

②病室サイン設置の現場作業：

病棟廊下での壁画作業完了後、スタジオで制作したアクリル板サイン13枚をそれぞれ事前に決定した病室に振り分けシリコン接着した。(図11)

③こどもセンター銘板の現場作業：

最後の現場作業として、事前に制作した陶片パーツから「こどもセンター」の各文字を組み立て、病棟入口壁面にシリコンで接着設置した。(図12)

5) 竣工・内覧会

病院側の配慮のお陰で、大きなトラブルも無く無事竣工を迎えたが、当初予定日の8月31日より1週間ほど遅れた。竣工後9月中旬に病院側が実施した「室内空气中化学物質濃度測定検査」の結果、基準値以下の測定値が得られ10月からの病棟運用には問題はなかった。

9月下旬、10月からの病棟運用に先駆け、報道機関及び一般への新病棟のお披露目として内覧会が実施された。見学者へのプレゼンテーションを学生たちが行い、責任と達成感を再確認できたようだ。(図13, 14, 15)



図13 報道機関取材



図14 竣工

3. こどもや家族、医療従事者の感想・意見

制作・施工完了後約1ヶ月間、塗料や施工素材の匂いや発生物質が規定値以下に落ち着くまでを準備期間とし、その後新病棟への移転、実運用がなされた。準備期間を経て実運用された際に、こどもたちや家

族、小児病棟医療従事者から得た意見感想は概ね良好であった。一部ではあるが、下記にまとめる。

- ・楽しい、かわいい。
- ・環境が良くなった。
- ・病院らしくなくて良い。
- ・穏やかな気持ちになれる。
- ・少しおとな向けに感じる。

#### 4. 考察

改善点は勿論あるものの、完成した空間への満足度は概ね良好だったようだ。附属病院関係者や患者家族の感想や意見から、ホスピタルアートが空間内で機能していると言える。ただ、新病棟への患者子どもたちの病状への配慮から引越日に立ち会うことができず、子どもたちの反応を直に伺い知ることができなかった（後日医師や師長より子どもたちの良好な反応は伝え聞いた）ことが心残りである。

今回の試みは、ビジュアル表現による院内空間の構築というプロジェクトであったが、患者や家族そして医療従事者など病棟の人々が参与し生まれる関係性や出来事に重点を置いたアートによるアプローチなど、今後も学際的な連携の中から「ホスピタルアート」の意義や芸術活動の可能性について考察を深めていくことが可能だろう。

アートが果たす社会的役割が大きいことは自明である。しかし、その効果効能を検証し具体的に示すことは難しい。それはアートというものが単純に数値化できない人間の心に作用するものだからである。数値では測れないアートの豊かさをしっかり認識すること。そしてその価値を見定める眼を持つことも、ホスピタルアート研究の重要な課題だろう。

#### 5. まとめ

これまで佐賀大学において大学内の医学部と芸術系学部が協働した例は少ない。今回、附属病院でのホスピタルアートの実践という形で学際的研究がなされたことは非常に意義があり、総合大学における芸術研究の発展的可能性を示すことができた。

教育面でも、医療現場という社会的実地にアートを取り入れた空間づくりという本研究は、芸術活動を社会的行為として、より広い視野で捉える意識を育むとともに、社会における芸術の可能性、社会における医療のあり方を、学生・教員・医療従事者のそれぞれが領域や立場を越えて思考することへ繋がる機会となった。

アートは人の心に大きな作用をもたらす。しかしそれは全てのアートが人の心の救いに繋がるわけでは無い。患者が負担や苦痛を感じ病状を悪化させてしまう場合もある。あくまで、ホスピタルアートとは本来の治療の補完的役割であるということを見失ってはならない。そのことを十分に踏まえた上で、ホスピタルアートの意義や可能性の考察を深め実践していくことが、日本においてより広くホスピタルアートが浸透していくとこに繋がる。今回の試みが、未だ認知度の低い日本におけるホスピタルアートのケーススタディーのひとつとして今後の研究の参考となることを願う。



図15 病棟に訪れた子どもたち

### 謝辞

本研究にあたり、医学部との連携と様々な調整にご理解とご協力を賜った附属病院の関係者の皆様、陶板制作の技術サポートと設備協力を賜った本学部有田セラミック分野教員の皆様に、厚く御礼申し上げます。

### 註釈

1. 日本の伝統的な画題であり画面構成。四季折々の草花を、同一画面上に意図的に散りばめ同居させる、リニアな時間軸を意図的に逸脱する絵画空間。
2. 日本の伝統的な絵画形式。横長の紙を水平方向に繋ぎ合わせ、長大な画面に情景や物語などを連続して表現したもの。
3. 18世紀日本で発明されたシルエットパズル。似たものにタングラムがある。正方形を大小まちまちの7つのピースに切り分けられており、ピースの組み合わせでできる形を楽しむ。

### 参考文献

- 森口ゆたか、山口悦子『病院のアート—医療現場の再生と未来』アートミーツケア学会、2014  
佐藤学『驚くべき学びの世界—レージョ・エミリアの幼児教育』ワタリウム美術館、2013